

## 心惹かれる秋田の風景を描く

介護老人保健施設「山盛苑」施設長  
秋田赤十字病院名誉院長  
宮下 正弘 さん

『あきた経済』4月号から表紙の水彩画を提供いただいている宮下正弘さんからお話を伺いました。宮下さんは、長年にわたり医師として、また秋田赤十字病院院長として多忙な毎日を送られるなか、本県の四季折々の風景などを水彩画として描いてこられました。秋田銀行が目指す長活きを実践されているおひとりです。

宮下さんに、水彩画をはじめられたきっかけや描き続けてこられた原動力は何かなど、お話を伺いました。

——宮下さんは長野県のご出身でいらっしゃいますね。医師として秋田赤十字病院に赴任された経緯についてお聞かせください。

長野県の高校を出た後、新潟大学の医学部に進学しました。私の両親は教員だったのですが、教員の道に進まず、新潟で医療を学ぶことを決心したのは、伯父の影響です。伯父は新潟で開業医をされており、のちに町長も務めた人でした。父から、「伯父のような人間になってほしい」と常々言い聞かされ、自然と医師に憧れるようになっておりました。大学卒業後は、新潟大学医学部付属病院(現：新潟大学医歯学総合病院)に所属し、内科医として臨床・研究に打ち込みました。

秋田赤十字病院に行くことを決めたのは、39歳のとき(1981年)です。新潟大学の学生時代の恩師で、当時の秋田赤十字病院院長であった竹本吉夫先生から、「秋田赤十字で内分泌・代謝の分野を強化したいと考えている。ぜひ手伝ってくれないか」と誘われたのです。学生時代、竹本先生の情熱のある講義に魅せられていたこと、研究で教授を目指すより臨床を行

いたいと考えていたことから、お誘いを受けることにしました。1982年に秋田県に転居し、それから40年以上秋田に住んでいます。



(宮下 正弘さん)

——医師として多忙を極める中、どのようなきっかけで絵を描き始めたのでしょうか。

子どものころから絵を描くことが好きだったので、美術部や絵画教室に入ることはなく全くの我流で、しばらくは絵を描くこともなくなっていました。1990年、「明日の秋田を造る中国旅行団」という視察旅行に、医療スタッフとして随行しました。妻から「せっかく中国に行くのだから、スケッチをしてみたらどう」

と勧められ、行く先々の心惹かれる風物を十数枚の絵に残しました。そのことをきっかけに、今まで忙しさから抑え込んでいた、絵に対する情熱がよみがえり、休暇や休憩時間、会議等での出張中といったタイミングで絵を描くようになったのです。

絵を描くことは、多忙な日常に対しよいリフレッシュになりました。展覧会に出そうとか、高い向上心を持つというよりは、自分自身と向き合っ、その時々に残った風景を描くようにしていたのが、かえってよかったのかもしれない。

描く対象は、人物というより自然や街並みが多いです。うまく描けなくても自然は文句を言いませんから（笑）。巨木や古い建物といったテーマには、特に心を惹かれます。永い時間、そこに在って地域の移り変わりを見つめてきたところにロマンを感じますね。（巨木や建物に）今まで何を考えてきたのか聞いてみたいくらいです。

——作品を拝見しておりますと、秋田県  
の自然や文化が、描いた当時の姿のまま残されている  
点に魅力を感じます。宮下さんにとって秋田県  
の魅力とは何でしょうか。

自分でも以前に描いた絵を見返し、「今では  
ずいぶん風景が変わったなあ」と実感します。

秋田県の魅力は、加工されていない生の自然  
があることと、それが季節や時間の移り変わり  
によって様々な表情を見せてくれる点にあると  
思います。同じ場所を描いても、描くたびに違っ  
た絵になるところに特に魅力を感じます。

会議などで様々な地域を訪れていますが、他  
の地域に比べると、秋田県は古い建物の保存・  
活用がまだ不足しているように思います。私も  
含め、他の地域から秋田に移り住んだ人は、秋

田の自然や文化をととても魅力的に思う一方で、  
それをもっと活用してほしいと感じることがあ  
りますね。

——私たちが宮下さんの絵を通して、秋田県  
の魅力を再発見するきっかけにしたいと思いま  
す。ありがとうございました。



#### プロフィール

- 1942年 長野県小県郡禰津村（現東御市）  
に生まれる
- 1960年 長野県立上田高等学校卒業
- 1966年 新潟大学医学部卒業
- 1982年 秋田赤十字病院に内科部長とし  
て赴任
- 1996年 秋田赤十字病院院長
- 2012年 秋田赤十字秋田短期大学介護福  
祉学科教授  
瑞宝小綬章受章  
秋田県文化功労者表彰
- 2015年 介護老人保健施設「山盛苑」施  
設長